

# ユーカラと女

萩 中美枝

モウル *mowr* は、ワンピース風のアイヌの女の肌着である。前あき仕立てにするが、上部を脱ぎ着できるくらい残して、あとは裾まで閉じてしまう。あきの部分には、一箇所か二箇所両側から結び合わせるように細い紐をつける。この紐をヌマツ *numat* (*numachi*) という。

むかしは、一本失ってもペウタンケ *pewtanke* (危急を知らせる女の声) をやって村中総出できがしたという針、その貴重な針をヌマツにさせて、その上を木筒で覆ってチシポ *chispo* という針差筒をつくることもあった。また熊を解体するとき、皮を剥ぐのに先ずのど元から小刀を入れて下方に向けていくが、雌であれば、胸のところで一旦小刀を抜き、皮を二〜四センチメートルほど残しておいて、最後にプツンとこれを切る。その残した箇所を *numat* というなど、胸紐にかかわる話が多く、ユーカラにもたびたび登場する。ことに少女が大人の仲間入りをしようとする頃、その様子が次のような常套句としてうたわれている。

シノツ *shinot* (あそび、たわむれる)

ヌマツ *numatpo* (モウルの胸紐)

エキライユ *eikiraye* または *hiroraye* (高くに押しやる)

これまでの訳者のうち、この句を詳しく説いているのは金田一京助博士である。

*shinot* (遊・戯) *numat* (紐、殊にここは女衣モウルの胸の紐) *po* (指小辞) *e* (それもて) *hi* (高) *raye* (よせる、よせあつめる、やる)。アイヌの女は胸をやかましく保護す。年頃になれば胸のはだからぬ様モウルといふ衣服を着る。之は胸もと数個所に左右から結びつくる紐があり、きちんとこれをむすび襟元の開かぬやうに殆ど首のつけ根のところまで左右より緊む。

モウルを着けるのは女になったしるしで——中略——胸のふくらむ程になれば若者だちの恋の戯がはじまって乳房をつかませると云ってふざけかかって胸へ手を入れ、さわぐ習いがある。それで *shinot* (それ、たわむれ) *numat* (紐) ともいふ

と述べ、対訳は

女衣の紐を

胸高に緊めたる

(次句——美しい少女) (金田一京助『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』一九三一年)

となつている。その後は

あそびの小紐を

えり元高くしめ (金成マツ筆録金田一京助訳注『アイヌ叙事詩

ニューカラ集Ⅰ』一九五九年)

初めて

成女着を着けた(『同Ⅱ』一九六一年)

おとめの胸紐を

高く緊めた(『同Ⅷ』)

などと訳されている。

萱野茂氏は、金成マツの原文をシノツ(遊び)ヌマッポ(胸ひも)リック(上)オライエフ(寄せ物)と訳し、次のような対訳をしている。

遊びの胸ひもを

上へ上げたそれらしい(北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財ニューカラシリーズⅠ』一九七九年)

また鍋沢元蔵筆録・扇谷昌康脚注のものには、はじめの頃「襦袢の小紐を」と訳されて特に *shinot* の説明はされていなかったが(門別町郷土史研究会『アイヌ叙事詩クトネシリカ』一九六五年)、後には次のような訳が見える。

遊びの胸紐を

結びつける

遊び紐を

高くした

遊び紐を

上へあげる

夫のほかには手をふれさせなかった胸紐に、女は特別の感情をもっていた。一九六四年二月、平取町二風谷で熊を送るまつりの映画の撮影があった。その仕事を手伝っていた私はミシンで大量生産したモウルを持って、行って女たちに着てもらった。粗末なものだったのに、フチ huchi (おばあさま) たちは胸紐を見たとき、いっせいに声をあげた。「ヌマッポ numatpo (胸紐よ!)」と言いながら頬に押しあてる人、いとしげに撫でさする人、まるで恋人にでも出会ったようであった。そのとき受けた感動は北海道の学会にも報告しているが、いまでも鮮明に覚えている。女であれば、誰もが経験する少女から大人になろうとするときの不安と羞らい、その思いをアイヌの女たちは胸紐に託したのではなからうか。私どもの少女の頃は、ひとりで和服を着ることを嫌けられた。洋服とちがって乱暴に手を動かすと襟元がゆるむ。胸元を気にして、いつか着物の衿をもてあそぶようになる。そのくせが年を取っても直らない人をよく見かけた。そこで私は *shinot* を「もてあそぶ」意とし、次のように訳した。

タンパネバ	tampa ne pa	この年ごろ
シノツヌマッポ	shinot numatpo	胸紐をもてあそび
エキライエ	ekiraye	襟元を気にするように
パツノアンベ	pakno ampe	まで大っぼくなった
ポンメノロ	pon-menoko	少女

この場合、*ekiraye* が説明不足だが、はだけた胸を合わせるのは、襟元を上押し上げることにもなる。つまり、胸紐の結び目が

ゆるむと胸元がひろがり、きつちり結び合わせると結び目が胸高に押し上げられて娘らしく胸元が引き締まるのである。

アイヌの女は、ひまきをえあれば針仕事をす。神々の国でも、ひだん女神は刺繡に余念がない。その様子がユーカラにあらわれるとき、伝承者が女であれば長々と説明される。次の句は、ヒーローが育ての姉の様子を語るくだりである。

shi-so sam ne 姉のそばに  
ehorarpa お座りになつて  
karkar kunip 針仕事に  
atomsama ひたすら  
yayomara 没頭していらつしやる。  
ikarkar wa 刺繡を  
inkar-an ko 見ると  
ineap kusun 何という  
ashkai wa 見事な  
ikichi nankora なされようだろう  
karkar kunip 針使いに  
tu kamui nish ne 神の雲  
re kamui nish ne 多くの神雲が  
yayebumpa たちのぼる。  
rupne moreu 大きい渦の紋が  
chihokaybare うねり、  
moreu utut ta その紋様の間に  
tu kani pon moreu 小さい金の渦  
re kani pon moreu 数々の小渦紋が

uwatore 続を  
moreu uturu 渦紋様の間を  
chiorente kane 埋める。  
anamasu なんという  
auwesuye すばらしさ。  
kenn ru kesse 針あとを  
shikkoteshu みつめ  
kenn ruwetoko 針先を  
shikomare kane みやりながり  
keshio ikarkar 毎日刺繡を  
koro okai していらつしやる。  
(原文 金成マツ 訳 筆者『アイヌ叙事詩ユーカラ集』前掲書)

語り手が男の場合は、女の容姿を讚美する句が長く続くことがあるが、針仕事など、女の手仕事に関係のある描写は女の伝承者ほど詳しくはない。それでも常套句を省くことはないから重要な部分だけは消えずに残される。女が糸をつむいでいる様子もユーカラによくあらわれる。とくにカエカ ka-eka (糸を繞る) の状態が次のような常套句になつてゐる。

otu ka shinkop 糸のシンコフ  
ore ka shinkop 多くのシンコフを  
ranke ranke 下ろし下ろしする  
これも金田一博士の説明が詳しい。

otu 及び ore は数を重ねる意の修辭。ka (糸) shinkop (滑結 わざ)。糸を両手と口とを用ひて紡いで、今は ka-ni (糸木、炬の灰へ立てた尺許の又木) へ巻き巻きするが、或は火糊

の横木を越して續んだ部分を玉にして垂らし、滑結して留めてゐる。ranke ranke は、續んだ部分を續むに從つて除うし除うしする。

このとき「滑結、わち」という訳をされた shinkop を、のちに「すじこけ、輪」と訳し、「たぐきんのすじこけをおとすは、糸を縫つてたぐきんの輪をおとしていること」(『アイヌ叙事詩ニカラ集II』前掲書)とある。

ほかに「O-tu-ka-shinkop そつじ・数々の・糸(麻糸) つむぐ。ranke ranke つむいだ糸を下に下げ下げすることをいう」(『アイヌ叙事詩クトネシリカ』前掲書) いうのがあるくらいで、取り立てて説明してあるものはなく、そのほとんどが shinkop を「つむぐ」「たぐ」と訳している。しかし shinkop にそのような意味はない。

『オチラー辞典』に「shinkop 鎖、滑結(マサ) n. A chain, A slip-knot」とあり、『アイヌ語方言辞典』では「じむじかぜ」「たぐき」の項の中に shinkop が見える。いずれも輪が連なっているような状態を連想させる。オチラーの訳、chain は何からヒントを得たのだろう。アイヌの刺繡のやり方のひとつに chain stitch (鎖縫い)と同じようなものがある、糸を一箇所はずすと、そこが slip knot になって、引張ると全部解けてしまう。だが、この鎖縫いの用法の中に shinkop という語は使われていない。オホオト、オホカウ oh-ka といいはかは、それに技法としての語が加えられるだけである。

そこで、二風谷の貝沢トロシノさんに頼んで樹皮の内皮から繊維をとり、それを細くさいてから、昔のままの手法で糸縫りをしてもらうことにした。

まず、二本の端を前齒にはさんで固定させ、一本は右手、一本は左手で縫りをかけてから、それを擦り合わせていく。これが ka-eka である。然り糸が長くなるに従つて、まだ縫っていない部分が絡みつき、もつれあつて、プチンとした小さな玉ができる。ほうつておくと玉が幾つもふえていく。そのもつれた糸の玉が ka-shinkop (ka shinkophi) なのであつた。私どもが縫い物をするときも、針に通した糸を短か目に切つてキリッと仕立てるのがコツだが、つい糸を取り替へたりするのが面倒と長い糸にすると、糸が途中でもつれ合つて小さな玉ができる。それと同じ玉であつた。見ると、トロシノさんは、そのもつれた糸玉を時折しごくようにして下ろし下ろししながら ka-eka を續けていた。

その後 shinkop をながして得た言葉は次のようなものであつた。

アットウシンノツ atush-shinkop (厚司の shinkop)

アイヌの女には膝行・膝退の作法があつた。まつりの際のさままなしきたりの中に数多く見られるが、客人に対しても行われる。丈夫な厚司でも膝前がすり切れて糸の端が顔を出し、互に寄り合ひからみ合つて小さな毛玉が点々とできる。その毛玉のことをいう。裾がすり切れると、毛玉は裾に沿つて一列に並ぶ。それはチンキンノツ chinki-shinop (裾の shinkop) で、袖口ならトウサペロシンノツ tusapar-shinkop (袖口の shinkop) とぶぶつ。

オトツシンノツ otop-shinkop (髪 of shinkop)

春風が吹くと、雪に閉ぢられていた間のじみが土ぼこりと共に舞い上がつて髪をなぶる。アイヌは男も女も切り下げ髪であつた。直毛は醜女の形容にも使われるほど嫌がられ、ゆるいウエーブのかかつた巻毛が普通だから、もつれやすい。ことに春の風や、潮風に当

たると *shinkop* がたくさんできて、くしけずるのに泣いた経験を  
もつ女性は多い。

*shinkop* は、いろいろなところにあつた。まとめると、毛玉のよ  
うにもつれ合つた玉の状態をいうらしい。それも連続してできるよ  
うなものである。ただし、一個でも *shinkop* という。わか  
つてみると、何の変てつもない言葉である。それなのに、多くの語  
彙を集めた『分類アイヌ語辞典』<sup>(6)</sup>にも見当たらない。バチラー辞書に  
は *Tush eka* “*to make a rope*”<sup>(6)</sup> はあるが *ka-eka* がない。語彙  
だけでなく女に関する事柄の説明が足りないように思われる。

一冊の本(『アイヌ神話集』一九二三年)を世に出して十九才で  
逝つた知里幸恵が冒頭にあげたユーカラの一節に「銀の滴降る降る  
まはりに」というのがある。のちに知里真志保が「銀のしづく降れ  
降れまわりに」と訳したので「降る」と「降れ」がよく問題にされ  
るが、原文は *shitokani* (銀) *-pe* (合成語の中にあられる「水」  
*ran ran* (降る) *pishkan* (周囲) で、主格をあらわす人接  
接辞がつかなければ動詞がそのまま命令形にもなるから「降る」  
「降れ」のどちらでもよいことになる。

それよりも興味をひくのは *pe* を滴と訳したことである。*pe* は、  
*pe-taru* (水汲みにく道) *noiki-pe* (雨だれ) などと合成語の中  
での水をあらわす語で、幸恵も草稿では「あたりに降る降る銀の水」  
としていた。このノートを金田一京助博士に送つてから本にな  
るまでの少女の彫琢する様子が偲ばれる。金田一博士が手を入れた  
のだという臆測もされているが、これは幸恵の手に間違いあるま  
い。金田一博士の訳とは異なるし、ノートの欄外に書き込まれた質疑  
応答ぶりからも推測される。—— *[annu o ituitye]* を日本語で

何と云ふのか、私はいくら考へても思ひ付けませんのでそのま  
にしておきました」「御尤德斯、籤<sup>6</sup>ト申シマス。」「ウリリは鳥の  
名ださうですが日本語で何といふか、誰も知りません。バチラーニ  
シバのアイヌ語辞典でも見たらわかる事と思ひます」「鶴トアリマ  
ス。ウガラストモアリマス。鳥ニ似テ黒ク、水クミッテ魚トル鳥デ  
セウ」——

幸恵の神話集には女の息遣いが感じられる。かなり整理されては  
いるが、伝承者は母方の祖母金成モナシノウクで、語り手も訳者も  
女であつた。

幸恵のおば金成マツは、母モナシノウクから受け継いだユーカラ  
をノートし、一〇〇冊余を金田一博士と幸恵の弟知里真志保に残し  
ている。それにはローマ字でアイヌ語が書き連ねてあるばかりで、  
和訳はされていない。いつか砂沢クラさんが自分の語つたユーカラ  
の一節を「虹のような七色の色の……」と訳したが、原文に出てく  
る色は赤と白だけであつた。ユーカラは変容し、言葉が省略されて  
も、伝承者の胸の中には原像が生きている。もし金成マツが自分の  
ユーカラに訳をつけるとしたら——と私は思う。

これまでの、すぐれた先人たちも、男であつたばかりに見落した  
女の部分を、私はこれからも拾つていこうと思う。

注

- (1) 『北海道人類学協会々報』(一九六四年)
- (2) 平賀サダモさん(明治三五年(昭和四六年) ユーカラの伝承者。萩中  
美枝『アイヌの文学 ユーカラへの招待』(一九八〇年) に彼女のユ  
カラが収録されている。
- (3) 金田一京助『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』(一九三一年)
- (4) ジョン・バチラー『アイヌ・英・和辞典』(一九三八年)

## 岩崎美術社

民俗民芸双書・新刊

# 植物と民俗

宇都宮貞子著

植物民俗学の第一人者が、澄んだ観察眼と心でとらえた、長年の綿密な探訪記録にもとづく草木の歳時記、山村の生活誌。素朴な植物をいとおしむ著者の真情がにじむ珠玉の佳篇を通して、かつての暮らしと生活がよみがえる。

信越地方の古老の貴重な体験をじかに聞き書きし、生活のすみずみにまでとけこんでいた植物と人との触れ合いをつづる。

B 6判上製本貼箱入口絵八頁本文三〇六頁 定価二二〇〇円

(5) 服部四郎編『アイヌ語方言辞典』(一九六四年)

(6) 知里真志保『分類アイヌ語辞典』(一九五三年～一九六二年)

(7) 知里真志保「アイヌ神話 銀のしづく降れ降れまわりに」『野性』一五号所収(一九五一年)

(8) 幸恵が金田一京助博士に送ったノート。現在は金田一春彦氏から寄贈されて北海道立図書館にある。

(9) 砂沢クラさん(明治三二年) 旭川出身、ユーカーラの伝承者。

(はぎなか みよ)

## 山の民俗

岩科小一郎著 一六〇〇円

## 市と行商の民俗

北見俊夫著 一八〇〇円

## 石塔の民俗

土井卓治著 一五〇〇円

## 馬娘婚姻譚

今野円輔著 一四〇〇円

## 性風土記

藤林貞雄著 一八〇〇円

▶ 内容見本呈 ◀

東京都文京区本駒込 3-39-6  
振替東京 6 90649 電(824)1731